

大正の女性文学

②日露戦争後

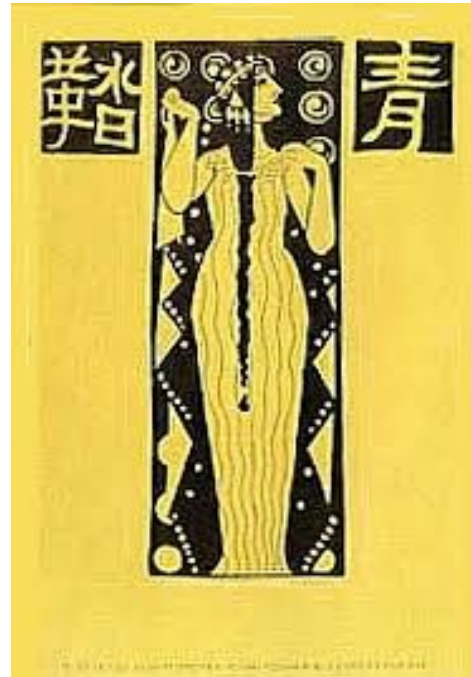
- 野上弥生子
- 田村俊子
- 水野仙子
- 尾島菊子
- 生田花世
- 素木しづ

* 新しい女

『新潮』特集「新しい女」1912.9

『太陽』特集「近時之婦人問題」1913.6

* 『女子文壇』・自然主義・『青鞥』



近年の私小説研究

- 自己表象テクスト
- 自分を登場人物→自分を主人公・語り手
- 自己生成小説

田山花袋「蒲団」『新小説』 M40.9

真山青果「茗荷畠」『中央公論』M40.11

島崎藤村「芽生」『中央公論』M42.10

正宗白鳥「落日」『読売新聞』M42.9.1-11.6

近松秋江「別れたる妻に送る手紙」『早稲田文学』M43.4.1-7.1

志賀直哉「大津順吉」『中央公論』T1.9

- 対象は男性作家のみ

自己表象テキスト

- 作家が自分自身を登場人物として造形した小説＝自己表象テキスト
(10)
- 「私小説」という色眼鏡を外し、〈自分を書く〉という表象行為が立ち上がってくる様相に眼をこらそう。すると、明治末から大正にかけての文化空間の理解は、まったく様変わりしてみえるはずだ。投書雑誌が煽り立てる青年たちの文学への欲望。その糧となる作家情報や創作の楽屋裏を明かすモデル情報の配信。そうした諸情報の交錯から立ち上がる現実参照的な読書慣習。倫理学が鍛え上げた〈自己〉〈人格〉観念は教育制度を介して青年達を成形していく。そこから、教育によって切り分けられる世代間の差異が顕在化してくるし、一方、〈自己〉を論じることが青年の間でブームのようになり、〈自己〉〈人格〉が芸術を創作・批評する重要な基準として採用されてもいく。〈自分を書く/描く〉小説と絵画は、そうした中で新しい意味をまとう。〈自分を書く〉行為はこの時、新しい自己、新しい作家を描きだすものとして[積極的な:傍点]意味を保持していたのである。

(日比嘉高『〈自己表象〉の文学史 自分を書く小説の誕生』翰林書房、2002.5)

宇野浩二「甘き世の話」 (『中央公論』1918.9)

- 近頃の日本の小説界の一部には不思議な現象があることを賢明な諸君は知つて居らるゝであらう。それは無暗に「私」といふ訳の分らない人物が出て来て、その人間の容貌は無論のこと、職業にしても、性質にしても一向書かれなくて、そんなら何が書いてあるかといふと、妙な感想の様なものばかりが綴られてゐるのだ、気を付けて見ると、どうやらその小説を作つた作者自身が即ちその「私」らしいのである。大抵さう定つてゐるのである。だから「私」の職業は小説家なのである。

→「私小説」

武者小路実篤「二つ」

『白樺』2-1

- 自分はどうかして西田の「すばらしい作」をつくった事を喜びたいと思つた。喜べたらどんなに気持ちがいゝだらうと思へた。しかしやけていけない。自分がなさけなくなる。

園地公到「葡萄」

『白樺』3-3

- ニ夕月ばかり前から書き度いと思うって居る事がどうもうまく掴めないで、頭にしつかり這入って居ないので筆が取りにくい。今度こそはどうしても書き上げたい。机の上へ原稿紙と、覚え書きの雑記帳を開いて、毎日々々その前に座つて視るが始めの書き出しすら出来ない。部屋の中を隅から隅へ斜めに歩いて見て又机の前に座る。

- 正親町公和「×切前」『白樺』3-9

机の上に書きかけの原稿を広げ放しにしてゴロンと仰向けに寝て了った。

- 長与善郎「針箱と小説」『白樺』4-1

無理をしても碌なものは書ける訳はないと思い直して、座布団を二三枚畳の上に敷いたなり其上にゴロリとけつたるい体を横にした。

女性作家の場合

- 投稿家の登場
- 自然主義的な筆致の作品
- 自己をモデルとした登場人物＝視点人物

- 自己を登場人物にする小説
- 自己表象小説といえるものは現れていない

水野仙子の「四十余日」

(『趣味』、1910.5)

- 行火に小蒲団をかけて、湯気のとつ火鉢の傍で、枕時計の音を聞きながら、お芳は雑誌を読んだり、病人に「我輩は猫である」などを読んでやつたりした。
- お芳はものを書くことを知つて、それを雑誌などに投書することを覚え、高じては常にその道にあこがれてゐた。女といふ名に縛られて、所詮許されさうもない望、ほんとに神様といふものがあるならば、私を殺して姉さんを助けて下さい。

尾島菊子「拍子木の音」

『スバル』1913.2

- ・『姉さん、電話ですつて。』／下から田鶴子が声をかけた。それは曇つた日の午後であつた。／『何処から？』／友子は机に凭れてペンを握つた儘大きな声で怒鳴つた。(略)何処からか電話がかゝつたと云つて、姉妹から女中までが騒ぎ立てゝある何だらう、と又口喧しく干渉されてもうるさい。／さう思つて友子はペンを握つた。此頃は始終気分が焦つてゐるので、彼女は何を書いても一向纏りがつかないのである。

書く女たち

- 水野仙子
書くこと＝許されそうもない望
- 岡田美知代
女性小説家の同居
小説を〈書くこと〉言及されない
- 尾島菊子
雑音にあふれた、集中のできない生活
- 素木しづ
物語内容(書きたいもの)≠作品(書いたもの)
- 書くという主題は前提化していかない

田村俊子『女作者』

- どうしても書かなければならないものが、どうしても書けない／＼と云ふ焦れた日にも、この女作者はお粧りをしてゐる。また、鏡台の前に坐つておしろいを溶いてる時に限つて、きつと何かしら面白い事を思ひ付くのが癖になつてゐるからなのであつた。
- 自分の眼の前を過ぎる一とつ／＼に対しても、自分の心の内に浸み込んでくる一人々々の感情でも、この男は自分と云ふものゝの上からすべてを亘らせて了つて平気である。この男の身体のなかはおが葛が入つてゐるのである。生の一とつ一とつを流し込み食へ込むやうな血の脈は切れてゐるのである。女作者は然う思ふと、わざわざ下へおりて行つて自分の相手にするのもつまらない気がした。

田村俊子「彼女の生活」

『中央公論』1915.7

- 自分は何処までも自分の尊い存在の上に一人で生きる。愛と云ふ卑怯な口実を求めて結婚の罠に落ちてはならないと優子は決心していた。
- ↓
- 家政の用の時間と自分の勉強の時間とを劃然と区別して、台所にある時間の間は、自分の頭脳を台所の中のものにするような習慣をつけた。
 - 優子は何うしていゝのか分からないような紛乱に落ちて、家の掃除も怠るようなことがあった。然しその傍から、男の仕事に対する愛と理解が優子を凝っとさせては置かなかつた。少しでも男を快い気分浸らせたいと云う望みが、優子の気を引立てゝ励まして優子自身を働かせた。

- 「何故女が子供を産まなければならないのだろうか。」優子はその自然の運命を呪い尽した。



- 「私は自分で育てます。ほんとうに可愛いのですもの。母の責任とか母の犠牲とか、そんなものは全で超越しちまっています。私はもう何も考えることはない。」と優子は思った。
- 子に対する愛、良人に対する愛、そうして自身に対する愛であった。すべてが愛であった。自分の生活が愛であった。自分の生活の力は愛であると、彼女は考えていた。

語り手の問いと答え

- 優子のこの生活の問題は、彼女に取って再び永遠に繰り返されなくって済む問題だろうか。
 - もっと大きな戦いが彼女の魂を強迫するに違いない。／然うして、哀れむべき女の必然の運命から到底逃れられないと知った時、彼女は又新奇な「愛の生活」を叫び出すだろう。
- * 近代 = ロマンティック・ラブ・イデオロギー
恋愛・結婚・生殖の三位一体
「愛」というソフトな装置

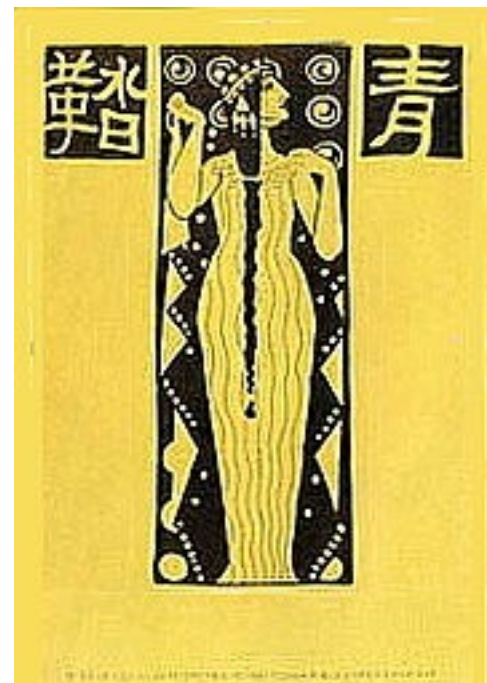
第一派フェミニズム

■平塚らいてう

原始、女性は太陽であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のやうな青白い顔の月である。

■与謝野晶子

山の動く日来る
かく云へども人われを信ぜじ
山は 姑く眠りしのみ
その昔に於て
山は皆火に燃えて
動きしものを。
されど、
そは信ぜずともよし。
人よ、ああ、唯これを信ぜよ。
すべて眠りし女
.今ぞ目覚めて動くなる。



『青鞥』1911-1916

女性たちの論争

母性保護論争

貞操論争

墮胎論争

売春論争

母性保護論争

平塚らいてう: 母子は国家によって保護されるべき

与謝野晶子: × 依存主義 精神的・経済的独立を

山川菊栄: 保護／自立 差別の解消が重要

山田わか: 家庭内での働きに誇りを

貞操論争

生田花世: 食べること > 貞操

安田皐月: 尊い宝 = 貞操

伊藤野枝: 女子だけ? 習俗打破!

墮胎論争

原田皐月:「獄中の女より男に」墮胎を正当化 親になる資格・責任

伊藤野枝:生命の軽視

らいてう:避妊は? 墮胎を罪にするなら母と子を保護する法律を

山田わか:墮胎も避妊も国の栄を破壊する不徳 人類の幸福

三ヶ島葎:生活の時間配分が必要

• 売春論争

伊藤野枝:「賤業」=高慢な侮辱

青山菊栄:公娼廃止運動は婦人問題の一部

伊藤野枝:結婚難=売淫不可避 男子にも貞操を

左翼思想の萌し

- 新婦人協会 1919-1922
市川房枝、奥むめお、平塚らいてう など
『女性同盟』
- 赤瀾会 1921-
山川菊栄、堺真柄 など
- 日本婦人参政権協会
ガントレット恒子 久布白落実 など

吉屋信子『花物語』



1916-1924『少女画報』に断続的連載(亀高文子・清水良雄・落谷虹児)
1925.7-1926.3『少女俱樂部』に3編が連載。(中原淳一)

- 野上弥生子

- 田村俊子

- 「文壇に於ける女流作家の活動
(大正十一年度)」『婦人宝鑑』
1923

最近における女流文壇、それは一言にして言へば、甚だ振はない、

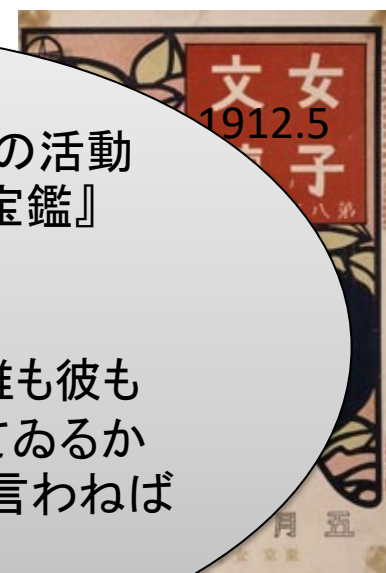
- * 新しい文壇

- * 『女子文壇』・自然



- 「文壇に於ける女流作家の活動
(大正十二年度)」『婦人宝鑑』
1924

かう数へて来ると、殆ど誰も彼もが、まるで眠つてしまつてゐるかのやうな状態であつたと言わねばならない。



まとめ

- 第二のピーク: 日露戦争後
 - 自己表象テキスト
 - 自然主義の潮流
 - 女性作家の自己表象テキスト？
-
- 「女」としての言葉の発見
 - 「少女」たちの読者共同体の生成